

<第二部>

後半は、オペラ《劇場界の都合・不都合》の内容の解説と鑑賞をしました。

ドニゼッティ歌劇場の《劇場界の都合・不都合》

《Le convenienze teatrali》2幕のオペラ・ジョコーザ

1979年10月12日・14日

指揮 Umberto Cattini

[配役] Edith Martelli (Corilla), Orazio Mori (Procolo)
Enrico Fissore (Agata), Laretta Perasso (Luigia),

1995年 10月20日・22日

[配役] Maria Costanza Nocentini(Daria), Alberto Noli(Procolo),
Bruno De Simone (Agata), Cristina Rubin (Luigia)

2003年10月25～29日

指揮 Fabrizio Maria Carminati

演出 Mauro Avogadro

[配役] Paola Antonucci (Daria), Nicola Alaimo (Procolo),
Paolo Bordogna (Agata), Paola Quagliata (Luigia)

1) ドニゼッティ歌劇場でのオペラ《劇場界の都合・不都合》の上演

ドニゼッティ歌劇場の公演記録*によると、ベルガモでオペラ《劇場界の都合・不都合》が上演されたのは近年になってからのことで、1979年に初演された後、1995年、2003年と、全部で3回公演されています。* (『ドニゼッティ歌劇場—公演年表 IL TEATRO DONIZETTI ~ Cronologia degli spettacoli 1786-1989』[ルッケッティ社出版 Lucchetti editore Bergamo])

1979年の秋のシーズン、10月12日と14日の2日間に亘る公演では、フィレンツェのオトス Otos 版(エーヴァ・リッチョーリ Eva Riccioli 校訂)が使われており、《劇場界の都合 Le convenienze teatrali》というタイトルで、2幕のオペラ・ジョコーザとして上演されています。日本ではこのオトス版が普及していましたが、1969年にミュンヘンで上演された改訂版《ヴィーヴァ・ラ・マンマ Viva la mamma》という、このタイトルでも親しまれていました。

一方1995年の秋のシーズン、10月20日と22日の公演は、1831年にナポリで上演されたバージョンをもとに作成された、クリティカル版の初演でした。Otos版とは登場人物、リブレットも異なります。

そして2003年の秋のシーズン、10月25日、26日の公演(10月27日～29日には学校用公演も行われた)の公演は、1995年と同じ舞台でクリティカル版での再演が行われ、1995年とは別の演出家によって若干の変更が加えられています。



1979年公演資料

<1979年に上演された、Otos版での登場人物>

コリッラ・スコルティキーニ Corilla Scortichini (プリマ・ドンナ)
プローコロ・コルナッキア Procolo Cornacchia (プリマ・ドンナの夫)
アーガタ・スカンナガッリ Agata Scannagalli (ルイージャの母親・ナポリ人)
ルイージャ Luigia (セコンダ・ドンナ、つまり第二ソプラノ)
ドロテーア Dorotea (プリモ・ムジコ[ロミオのように女声が男性を演じる])
グリエルモ Guglielmo (プリモ・テノール、ドイツ人)
ビルクローマ・ストラッパヴィーシェレ Biscroma Strappaviscere (指揮者)
プロスペロ・サルサパリーリア Prospero Salsapariglia (台本作家)
市長 Il Podestà / 興行主 Impresario

<1979年版のあらすじ>

ロッシーニ風の序曲(シンフォニア)の後、第一幕イントロダクション Introdizione の舞台は、ある劇場の広間です。

古代ローマの王に纏わるストーリーのオペラ《ローモロとエルシーリア》の稽古のために、歌手や作曲家(指揮者)、台本作家、合唱のメンバーらがピアノの周りに集まっています。そこにプリマ・ドンナが夫にエスコートされて現れ、エルシーリア役のアリアの稽古が始まります。〈私がどんなに素晴らしい歌を歌うかお聴きになれましてよ!〉と自分の歌声をひけらかし、さまざまなオブリガートやカデンツをつけて歌います。この登場のアリア Aria di sortita で、どんな装飾音やカデンツを付けて演じ聴かせるかが、最初の聴きどころです。

プリマ・ドンナ以外の歌手が自分のアリアはあるかと作曲家に詰め寄りますが、うやむやのままプリモ・テノールの稽古に入ります。ドイツ語訛りのおかしなイタリア語のこのテノールは、まだ喉が温まっていないためにひどい歌を歌います(Cavatina Guglielmo)。

指揮者が公演のポスターを読み上げようとする、セコンダ・ドンナ(ルイージャ)の母親アーガタが登場

場し、〈娘のルイージャのためにロンドは考えた?〉と迫ります(Cavatina Agata)。バス・ブッフオ扮するマンマ・アーガタは、このオペラの中で一番注目したい役どころです。

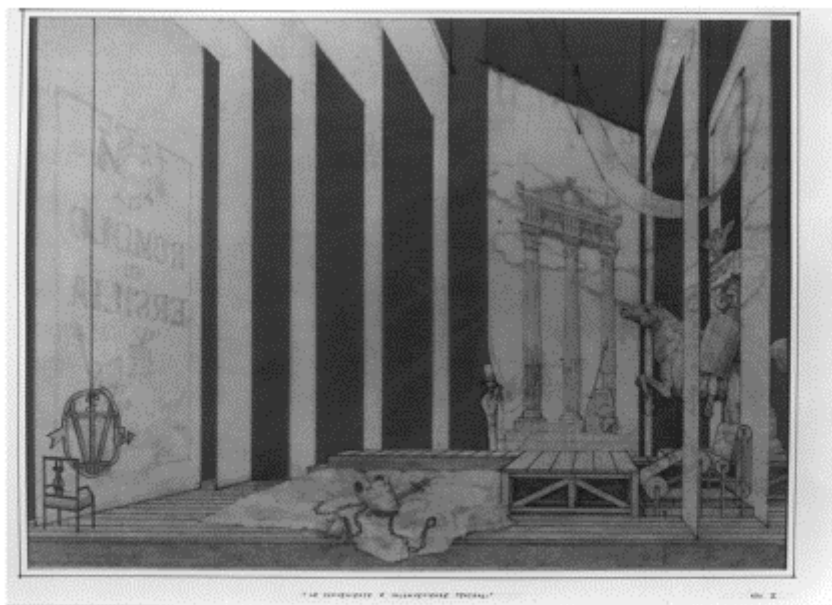
再びポスターを読み始めると、てんでに勝手な要求や意見を言い出します。少し前までは菓子売りをしていたくせにとバカにされたプリマ・ドンナの夫プローコロが申し開きをします(Aria Procolo)。

アーガタが娘ルイージャとの二重唱を要求すると、プリマ・ドンナは断固拒否して口論が始まります(Duetto Prima Donna e Agata)。

プリモ・ムジコ(ドロテーア)が役を降りてしまい、アーガタが代役をすと言い出し、スカラ座で歌ったこともあると言う彼女はプリモ・テノール(グリエルモ)との二重唱の稽古を始めます。しかし、彼女の歌のあまりのひどさにテノールが歌わないと言い出します。彼は作曲家(指揮者)の前で楽譜をびりびりに破ると、アーガタからは上着の袖を引き千切れられ、ついには怒って出て行ってしまいます(Terzetto Biscroma, Guglielmo e Agata)。

今度は、テノールの代役をプリマ・ドンナの夫プローコロがやることになり、指揮者は仕方なく受け入れます。そこにルイージャ宛てにリヴォルノの劇場から出演契約の手紙が届きます。手紙を読むアーガタと娘、台詞の作り直しをする詩人(台本作家)と作曲家の会話、〈公演は失敗に終わるだろう〉という新聞記事を読むプローコロとプリマ・ドンナの会話が絡み合う6重唱から、フィナーレ Finale へと続き、全員舞台に向かいます。

第二幕は舞台稽古のシーンです。



1979年の公演の舞台図

第一場。マンマ・アーガタは、楽屋で興行主と衣装のことで話をしています。もっと明るい色の衣装がいいとごねるアーガタに興行主は、この暗い色の衣装のままでやらなければ、憲兵を呼んで娘と一緒に二人とも契約を破棄すると脅して譲りません(Duetto Agata e Impresario)。

第二場。ドロテーアとテノールが機嫌を取り直して歌いたいと言い出し、アーガタとプローコロが騒がな

いために、別のシーンを付け加えることにして、ようやく舞台稽古が始まります。劇中劇、プロッツィ劇場でのオペラ《ローモロとエルシーリア》の幕が上がります。ローモロは船でローマを後にしますが、遭難し乗組員の中で彼一人だけが助かります。アーガタはローモロを誘惑する人魚役の姿で現れ、稽古が始まります。ここでロッシーニの《オテッロ》の〈柳の歌〉が使われているのですが、彼女は勝手に歌詞を変えて歌います (Romanza Agata)。

凱旋のコーラスに続いてローモロの役のプローコロが歌いだします(下の写真の場面)。しかし、テンポが遅れたり、音程が下がったり上ずったりと稽古にならず、そのまま葬送行進曲 Marcia lugubre から生贖の場面に入ります。

こんなにも不備な公演に対して、市長が補助金を出すことを取りやめるという知らせが入ります。公演が取り止めになると宿の支払や、買い物のツケの支払いに困る出演者たちは、一同夜逃げをしようと決めて、劇場から逃げ出します。



1979年公演資料

<1995年のクリティカル版初演の登場人物>

ダーリア・ガルビナーティ Daria Garbinati (プリマ・ドンナ)

プローコロ Procolo (プリマ・ドンナの夫)

ルイージャ・カストラガッティ Luigia Castragatti (セコンダ・ドンナ)

マンマ・アーガタ Mamm'Agata (ルイージャの母親・ナポリ語)

グリエルモ・ホルレマンド Guglielmo Hollemand (プリモ・テノール、ドイツ人)ピッペット Pippetto (プリモ・ムジコ[女声が男性を演じる])

指揮者 Il maestro di musica

チェーザレ・サルサパリーリア Cesare Salsapariglia (詩人・台本作家)

興行主 L'impresario

舞台監督 Direttore del palcoscenico

クリティカル版には、《劇場界の都合・不都合》というタイトルで一幕によるドラマ・ジョコーゾと記されていますが、1995年の舞台では二幕に分けて上演されています。

場面が音楽稽古の広間から舞台稽古の二つの場面に分かれるため、二幕としたそうです。



1995年公演資料

写真上は、階段やバルコニーに合唱を配置した、ロッシーニ風の豪華な美しい舞台です。写真下は、第一幕のプリマ・ドンナの登場のアリアの場面。



1995年公演資料



写真下は、No.4 のアーガタと指揮者との三重唱で、テノールのグリエルモが楽譜を破るシーン。



<クリティカル版のあらすじ>

第一幕

舞台は、ローディ(ミラノから30キロほどの街)の劇場の広間。短い序奏プレリュード(Preludio)の後、指揮者が新しいオペラ《ローモロとエルシーリア》の稽古を始めようとしています。プリマ・ドンナが夫のプロローコと、そしてセコンダ・ドンナのルイージャ、ドイツ人のテノールのグリエルモ、ムジコのピッペット、合唱、台本作家らも到着し、エルシーリアのアリアの稽古が始まります。エルシーリア役を演じるプリマ・ドンナのダーリアは、アリアを歌いながら、みんなに声をひけらかします(No.1 Introduzione)。面白くない者、絶賛する夫、公演の成功を期待するもの、それぞれの思いが一気に噴き出します。そこへバス・ブッフオ扮するルイージャの母親アーガタが登場します(No.2.Cavatina Agata)。彼女は娘のためにしゃしゃり出ているいろいろと要求し、さらにはプリマ・ドンナが歌い手になる前はトレードで屋台の菓子売りをしていたことをつつき始めます。アーガタが娘との二重唱を迫るとダーリアは絶対に歌わないと拒否し、喧嘩になります(No.3 Duetto Prima donnnae Agata)。怒って出ていったムジコの代わりに、マンマ・アーガタがローモロの役を歌うと言い出し、テノールとの二重唱の稽古が始まります(No.4 terzetto Tenore, Maestro e Agata)。しかしアーガタの歌があまりにもひどいことに腹を立てたテノールは、歌わないと言って楽譜を破りはじめ、アーガタはテノールの上着の袖を破ってしまいます。役を降りてしまったテノールの代わりに、今度はプリマ・ドンナの夫プロローコが歌うことになります。そこへ、リヴォルノの劇場からルイージャ宛てに出演契約の手紙が届きます(No.5 Sestetto <Livorno, dieci aprile>)。手紙にはマンマ・アーガタ抜きという条件付で契約を結ぶと書いてあり、手紙を読む母と娘の会話に、オペラの台詞の書き直しを話し合う指揮者と台本作家の会話と、「公演は失敗に終わるだろうという」新聞記事を読むプロローコとプリマ・ドンナの会話が交差し、会話がもつれて大騒ぎになります。そこへ警官がやってきて、無理やりマンマ・アーガタらを次の稽古のために舞台へと連れていきます。

第二幕は舞台でのリハーサルの場面。

アーガタの稽古のシーンにはロッシーニの《オテット》の「柳の歌」が挿入されています。しかし彼女は出だしを間違えたり、歌詞を勝手に変えてしまったりと、指揮者(作曲家)は嘆きます(No.6 Romanza Agata)。

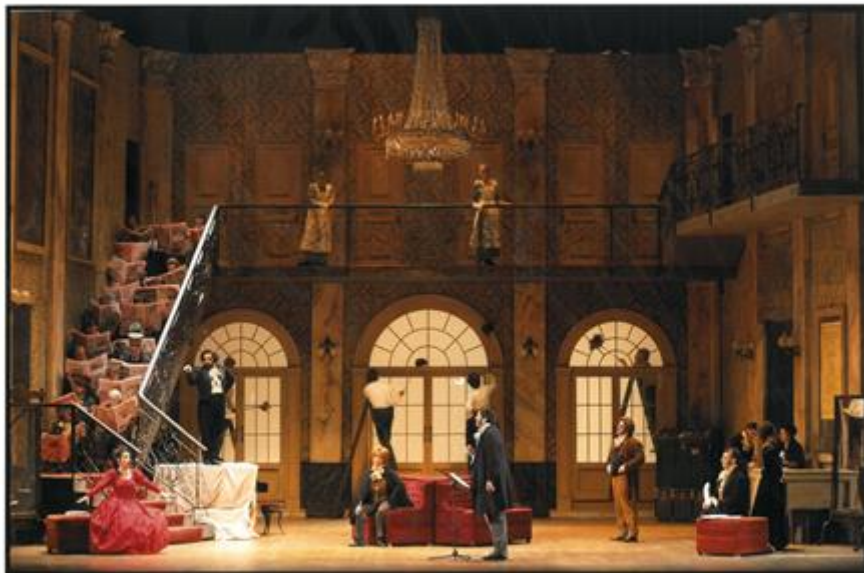
ここでアリア・ディ・パウーレ Aria di baule(それぞれの得意の楽譜をパウーレ(かばん)に入れておいて披露したことから、この様に呼ばれました)が挿入されます。

凱旋のシーンの稽古では、合唱とともにプロローコがローモロ役に扮して登場します(No.7 Coro)。しかし、テンポが遅かったり、音を外したりと散々な歌に、指揮者は先の葬送行進曲に進めます(No.8 Marcia lugubre)。生贄のシーンでアーガタが白い衣裳で登場したところで、興行主が公演の中止を告げます。ムジコとテノールの思いがけない降板に、劇場の監督が上演を許可しないという理由でした。それぞれがギャラをあてにして、買い物した分のツケや食べた分のツケなどの支払いをどうするか考え、夜逃げをするということで意見が一致、全員一斉に逃げ出して幕が下ります(No.9 Finale)。



1995年公演資料

写真上は、第二幕でローモロ役のプローコロが合唱と登場する、凱旋のシーン。



2003年上演資料

2003年の公演で(写真上)は、1995年の舞台をそのまま使っています。ほとんどの演出は1995年(ベッペ・デ・トーマジ Beppe De Tomasi)の再現ですが、新しい演出家(マウロ・アヴォガドロ Mauro

Avogadro)によって少しだけ変更が加えられています。たとえば写真のシーンでは合唱が新聞を持って出ています。

写真下は、〈リヴォルノ、4月10日〉の6重唱のシーンと、第二幕の凱旋の稽古のシーンです。



2003年公演資料



2003年公演資料



2003年公演資料

柳の歌???

Romanza Desdemona

Assisa a piè d'un salice,
immersa nel dolore,
giacea trafitta Isaura
dal più crudele amore:
l'aura fra i rami flebile
ne ripeteva il suon.

Romanza Agata

Assisa a piè d'un sacco
in mezzo del dolore
gemean fritti i sardi
nel più crudel rumore.
L'aura fra rape flebili
Ne ripeteva il suon.

マンマ・アーガタによって歌われる《柳の歌》は、“柳 salice”ではなく“袋 sacco”と変えられています。
く私は悲しみの中で袋のもとに座り、フライになったイワシはひどい騒音の中で呻いていました。風は

哀感を帯びたカブの間で音を立てていました」というパロディたっぷりの替え歌を歌います。この後、バレエを踊るシーンが加わることもあります。当時、演出家はいませんでしたが、現代では演出によっても舞台の仕上がり・成功が大きく左右されます。

現在手に入る映像のどれを観ても音楽と台詞が異なり、またさまざまなパロディの演出が加えられています。ドニゼッティは、当時のわがままな歌手や、納期を守らない台本作家らに悩まされたことを皮肉って、このファルサを書いたのですが、作品が演出家によっても台無しにされるとは、よもや思ってもいなかったことでしょう。ユーモアと茶目っ気たっぷりの、可愛らしいマンマ・アーガタもいれば、本当に品のない「お笑い」の舞台もあり、講演ではそのいくつかの例を映像で紹介しました。

この《劇場界の都合・不都合》を通して、ドニゼッティの作品の中でのロッシーニの影響や、当時の劇場界の様子および演奏家の技術のレベルを知ることが出来るのは、ひじょうに興味深いところです。

鑑賞の後、最後に聴講者からの質問を受けて、3時間半に亘る今回の講演を終えました。

- * オペラ《劇場界の都合・不都合》に関する更に詳しい内容の説明や、今回の講演で紹介した以外の資料などは、「生涯・作品 Biografia e Opere」の欄の「主要作品解説」で取り上げます。そちらも併せてご覧ください。
- * なお、この報告でご紹介していますドニゼッティ歌劇場の公演資料(写真・舞台図)は、歌劇場の許可なしに無断に転載することは出来ません。